

江戸時代の本屋は、出版のほか卸売販売や新刊書の小売をし、さらに古本の売買や貸本も行なっていた。現代では、出版社、取次、新刊書店、古書店が別々に存在するが、江戸時代は一軒で本に関する何もかもこなしていたのだ。

その中で古本部門の仕事は重要だった。それを証明する本屋自身の業務日誌というべきものが残されている。ひとつは京都の風月という名門の本屋、もう一つは江戸の慶元堂の隠居が残した記録だ。どちらも質の高い出版物を出してきたことで知られる店である。

日記を見ていくと、編集や制作といった出版の仕事もこなしているが、実は仕事の大半が古本にかんすることだったとわかる。風月の日記は、明和九年から安永二年までの間だけが残されているが、ちょうどそのとき、尾張藩が藩校の開設に向けて本の収集を始めていた。豊後の佐伯藩、若狭の小浜藩も盛んに本を集めていた。いずれも優れた蔵書で知られた藩である。それらにむけて大量の本を納めていたことが日記の中に毎日のように出てくるのである。金額も大きく、三、四日ごとに数十両の送金があり、日記に具体的な数字が出ているだけでも年間になると現代の価値で数千万円に匹敵する売り上げがあった。実際はこの数倍はあっただろう。

当時の藩校の学問は儒学だったので、ほとんどは漢籍である。それも唐本が多かった。この納本のために、その頃、京都の町で頻繁に開かれていた古書の市場から仕入れていた。長崎から入る新渡りの唐本は、その専門店が別にあつたので、風月は専ら古本で集めたのである。店主だけでなく番頭・手代たちにも手分けして市に行かせている。

江戸時代の中頃で、この大きな取引が出来たということは、それだけの流通があつたということでもある。蔵には大量の本がストックされ、店員たちが手分けして現物と帳簿の引き合わせをする様子も日記には詳しい。出版だけではとてもそんな収益は上げられない。

江戸の慶元堂の日記でも、隠居とはいえ精力的に仕事をする様子が描かれている。やはりその大半は古本の売買である。頻繁に本屋を回って、いわばセドリもしていた。中にはある買い取りで宋版の『爾雅注疏』を手に入れた。それを大事に繕いながら息子の店を通してどこかに納本したようだ。同じようにして入手した五山版は狩谷掖斎に売った。当時書物奉行だった近藤重蔵をはじめ、掖斎などの収書家たちとのつきあいも古書を通して深まっていたのである。

わたしたちの「先祖」である江戸時代の本屋は、むしろ古本が生業の中心だったのだ。それをこなすことで、本全体に目を肥やすノウハウが蓄積されたと思われる。その彼らが流通させてくれたおかげで、今日まで和本がよく残されてきた。この精神を受け継ぎ、和本を将来に伝えいく私たちの仕事も重要である。